

対談：テクノロジーと介護、 その向き合い方を考える

情報システム部と品質管理部という、役割も専門性も異なる二つの部門のトップが、テクノロジーが介護にもたらす変化と、その向き合い方について、それぞれの立場から率直に意見を交わしました。

※本対談記事では、対談の臨場感を大切にしながら、議論の内容をわかりやすくお伝えするため、発言の一部を文章として構成し直している箇所があります。発言の引用と編集部による説明文を織り交ぜながら、議論の流れが伝わるよう編集しています。

構成・取材・編集 | 石原浩巳（品質管理部）



生成AIで作成したイラストです

2026年の幕開け早々の1月7日、岡山。

情報システム部 部長 八十浩文執行役員と品質管理部 部長 坂本圭執行役員による、対面での対談が実現しました。

（以下、八十部長、坂本部長）AIやICT、各種ツールの話題から始まったこの対談は、やがて「人は何を担い、テクノロジーは何を担うのか」という、今まさに問われている本質的なテーマへと、話は自然に広がっていきます。

テクノロジーと現場の間にある「ズレ」

対談の前半で話題になったのは、テクノロジーと介護現場の間に生まれやすい「ズレ」でした。

品質管理部の坂本部長は、こう切り出します。

「IT側では当たり前とされることでも、介護の現場では、それを理解して対応するだけで大きな負担になることがあるんです」

変化に対応すること自体が、現場にとっては「心理的なハードル」になることもある。その現実を無視したままでは、どれほど合理的な仕組みでも「現場には定着しない」そんな問題意識がにじみます。

その声を受けて、情報システム部の八十部長は、ツール選定の現場でのこんな工夫を紹介してくれました。

複数のツールを検証したうえで、

「できるだけシンプルで、負担の少ないもの」を選ぶこと。そして、あえて「細かい仕様は説明しすぎない」こと。「全部説明しようとすると、それだけで身構えてしまいますから」



人と技術をつなぐ熱い思いを力強く語る八十部長



現場の違和感を真正面から、問題提起する坂本部長

二人のやり取りから浮かび上がってきたのは、課題の本質は「技術の優劣」ではなく、「どう伝え、どう現場につなぐか」にある、という点でした。

想定外は必ず起こる 一人の判断が求められる場面

話題は次第に、「人とテクノロジーの役割分担」へと移っていきます。坂本部長は、少し考えながら、こう語りました。「人間の能力には限界がありますし、人はそもそも不確実な存在なんですよ」その前提を忘れてしまうと、「システムは必ず現場とずれていく」というのです。

話の流れの中で触れられたのが、2011年の東日本大震災の際の原子力発電所事故の記者会見でした。当時、繰り返し使われた「想定外」という言葉。それは時に「責任を避ける言葉」のようにも聞こえました。しかし、介護の現場では、「想定外の出来事は日常茶飯事」です。マニュアルやシステムだけでは対応しきれない場面で、最後に頼りになるのは、

「状況を読み取り、判断する人の力」です。

この話に、八十部長も大きくうなずきながら、こう続けました。

作業そのものは、これから

ますます「テクノロジーが担える」ようになる。

けれど、「判断や方針決定だけは、

人が担い続けるべき領域だと思っています」



穏やかな口調でしたが、その言葉には強い実感がこもっていました。DXやAIがどれだけ進んでも、「何を大切にするのか」「どこへ向かうのか」を決めるのは人。テクノロジーは、その判断を「正しく、無理なく実行し続けるための支え」なのだ、そんな共通認識が、対談の中で少しずつ形になっていきました。

コミュニケーションとは「共有すること」

後半で繰り返し語られたのが、コミュニケーションの大切さでした。坂本部長は、こんな話をしてくれました。

「コミュニケーションの語源って、ラテン語の communis、つまり『共有する』なんですよ」

単なる説明や伝達ではなく、「立場や前提、状況を共有すること」が本当のコミュニケーション。「正しさや合理性だけでは、人は動かない」「理解した」「納得した」と感じて、はじめて「行動につながる」そんな現場感覚が、言葉の端々から伝わってきます。

八十部長も、ここで大きくうなずかれます。

「論理だけでなく、感情や納得感が大事なんですよ」

ICTの世界にいるからこそ、「人は感情で動く」という前提を、意識し続けたい。テクノロジーの話をしているはずなのに、話題はいつの間にか「人の心」の話になっていました。そして、対談の終盤で八十部長の口から登場したキーワードが、「エヴァンジェリスト」という役割でした。エヴァンジェリストとは、単に物事を動かす人ではなく、「なぜそれが必要なのか」「どんな背景や意図があるのか」を、相手が「理解し、納得できる形」で届け、現場に根づかせていく存在です。

話はさらに、人の配置や経験の話へと広がります。現場経験のある職員が情報システム部でICTを説明する。あるいは、現場を知る職員が品質管理の立場で改善を進める。こうした部門を越えた経験の往復こそが、組織全体の「翻訳力」を高めていく。エヴァンジェリストとは、特別な肩書きではなく、「経験の積み重ねの中で自然に育っていく役割」なのかもしれません。

対談の着地点 — 人間力とコミュニケーション

テクノロジーについて語り合った二人が、最後にたどり着いた答えは、とてもシンプルでした。人が本来力を注ぐべきなのは、「判断」「対話」「共有」「関係づくり」。そのためにこそ、「代替できる業務はテクノロジーに任せる」。そうした役割分担のもとで、「人間力とコミュニケーション」をどう育てていくか。それが、これからの介護と組織づくりの「土台」になる——両部長の言葉は、静かにそこで重なりました。

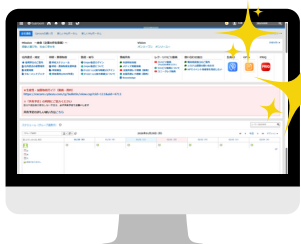


今回の特集企画では、テクノロジーの正解を示すものではありません。現場・品質・情報システム、それぞれの視点が、どこですれ違い、どこで重なったのか。その「考えるプロセス」を共有すること自体が、この対談のいちばんの価値かもしれません。この対談が、テクノロジーを「どう使うか」だけでなく、「どう伝えるか」「どう関係をつくるか」を考える小さなきっかけになれば幸いです。

「知りたい」を、自分のペースで

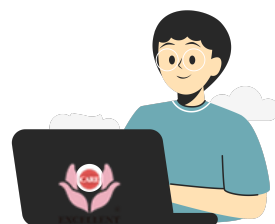
社員専用の動画を 配信しています

PRiQTV（ピーアールアイキュー・ティーヴィー）は、忙しい日常の中でも、私たちの仕事の品質に関わる知識や考え方を、「短時間で」「実務に活かせる形で」届ける、社内向け動画配信プラットフォームです。法令や安全に関わる基本事項、現場で役立つ実践の工夫、制度や取組の背景などを扱い、PRiQペーパーとも連動しながら、「知る」から「わかる」へ、そして「使える」学びを目指して配信しています。



▶ 配信中の動画一覧はガルーン内トップページの「PRiQ」赤アイコン、または
掲示板 > 品質管理部 > PRiQTV（動画配信）からご覧ください。

※ 活用ガイド（PDF版）も掲載しています。
初めて視聴する際は事前の確認をお願いします。



現在以下のテーマで15本の動画を配信中

- リスクマネジメント実践（知識・理論／危険予知訓練）
- 福祉サービス第三者評価に見る質向上の視点
- 利用者の視点で見る接遇（シリーズ）
- 感情を整え、行動を選びなおす技術（シリーズ）
- 学びを行動に変えるレポートの書き方
- 衛生管理マニュアル解説

動画は毎月更新予定です。
左記の掲示場所に最新情報をお知らせします。



本連載では、「地域交流」と「社会貢献」、ふたつの異なる価値に光をあてながら、現場の実践をご紹介します。
地域社会と共にある私たちの事業所は、それぞれのまちで人と人との関係を育みながら歩んでいます。あたたかなつながりと未来へ向かう力を、言葉や写真を通して発信していきます。

社会の扉を開くサポート、経験を学びに、学びが未来をつくる — 川崎医療福祉大学 医療福祉経営学科 学外実習受入れの取組み —

～未来のために～

医療福祉経営学科の学外実習受入れ

岡山県岡山市北区

令和7年10月20日～11月5日、

川崎医療福祉大学 医療福祉経営学科3年生の山本さん、西村さんを迎え、学外実習を実施しました。実習は金曜・土日祝日を除く平日に行い、主な受入れ施設はサービス付き高齢者向け住宅「アイグランデュ岡山」と「アイリーフデイサービスセンター西口」です。

アイリーフでは、川崎医療福祉大学の「学外実習」科目の一環として、毎年実習生の受入れを行っています。この授業では、学外実習から課題を探り、レポート作成や実習発表会へとつなげていく一連の学修プロセスが組まれており、私たちはその中心となる実習を引き受けています。介護という枠にとどまらず、高齢社会をはじめとするさまざまな社会課題を「福祉」と「経営」という一見相いれないそれぞれの視点で捉え、実践の中で学ぶ機会をひらくことは、私たちにとって大切な社会貢献の一つだと考えています。

まずは、事前オリエンテーションから

これから始まる実習での戸惑いをできるだけ少なくし、学生が思う存分体験に向き合えるよう、初日の事前オリエンテーションには特に時間をかけました。学生が安心して現場に入り、利用者様にも安心して関わっていただけるよう、実習担当者である須々木管理者と品質管理部の石原が、新社会人向け研修の一部として、社会人としての基本姿勢やコミュニケーションのポイント、介護福祉士の仕事や現場での関わり方について説明しました。また、介護サービスの現場に入る前に、高齢者とのコミュニケーションや認知症に関する基礎的な理解を共有し、学びと経験をつなぐための準備を整えました。

現場と制度、経営を往復しながら学ぶ

実習期間中は、デイサービスや訪問介護サービスの見学を通じて、利用者様とのコミュニケーションを体験しました。

あわせて、サービス付き高齢者向け住宅でのコンシェルジュ体験を行い、「おもてなし」の精神にも触れてもらいました。さらに、居宅介護サービスの渋江管理者から介護保険制度や事業運営に関する話を聞き、介護サービスの現場を体験するとともに、サービス種類の違いについて理解を深めるため、複数の事業所を見学しました。制度や仕組みを座学で学び、実際の現場で確かめることで、理解を立体的に深める構成としました。

加えて、人材開発部 柴垣部長によるマネジメントに関する研修、品質管理部 坂本部長による講義、グループ全体で行う新入職員研修（接遇・食事分野）へのオブザーブ参加、全社プロジェクト会議冒頭



株式会社アイリーフ



参加などを通じて、介護事業所における「経営マネジメント」に関連する取組みも体験してもらいました。

盛りだくさんの内容でしたが、山本さん、西村さんともに丁寧に耳を傾け、メモを取りながら、一つひとつの経験を自分の学びとして受け取ろうとする姿が印象的でした。

学びが出会いになり、未来へつながる

この実習をきっかけに新卒入社へとつながったケースもあり、以前実習に参加した学生からは、「一年前の先輩の実習発表を聞いて、自分のときはアイリーフを選ぼうと思った」と話してくれたこともあります。現在も毎年、川崎医療福祉大学から実習生受入れのご依頼をいただき、対応させていただいています。

多忙な現場の中で実習生を受け入れるためには、職場全体での協力が欠かせません。それでも、学生にとっての貴重な時間が、これからの未来づくりの糧になることを意識しながら取り組むことで、私たち自身にとっても新たな気づきや学びが生まれます。

経験を学びに変え、その学びが次の未来をつくっていく。大学との連携を通じて、そんな循環をこれからも大切に育てていきたいと思います。

文責：石原浩巳（品質管理部）





絆が「つながる」新しい一歩 ―― 地域と共に歩むエクセレント横浜磯子 ～地域とともに～

「古泉えんにちの会」

神奈川県横浜市磯子区

グループホーム エクセレント横浜磯子

「古泉えんにちの会」への
初参画レポート
取材日：11月8日(土)

前号でご紹介した「愛のお弁当ボランティア」がつかない縁。関根施設長からの「初めて地域の祭りにお誘いいただきました！」という弾んだ声に誘われ、現地へ向かいました。11月の冷え込む夜、静かな住宅街を歩きながら「本当にお祭りが？」と少し不安になりましたが、会場に一步足を踏み入れるとその懸念は吹き飛びました。そこには、地域住民が全員集まったのではないかと思うほどの熱気が渦巻いていたのです。

信頼がカタチになった「フリーマーケット」
エクセレント横浜磯子のブースは、人だかりをかき分けてようやく辿り着くほどの大盛況。今回初挑戦となったフリーマーケットでは、地域の障害者施設と連携してラスクを販売するなど、まさに「地域とのつながり」を体現する場となりました。



主催者の方からは、「エクセレント横浜磯子さんがいてくれる安心感と、これまでの活動への信頼があるからこそ、今回一緒にお祭りを盛り上げることができた」という心強い言葉をいただきました。

未来へつながる「ありがとう」の連鎖

お祭りの翌週、主催者の方がわざわざ施設を訪ねてくださいました。「地域から大好評でした。来年もぜひお願いします！」その感謝の言葉こそが、職員の皆さんが積み重ねてきた活動の成果です。品質管理部では、このように地域へ心を開き、新たな「つながり」を創出する施設・事業所を、これからも全力で応援していきます。
文責：坂本 圭（品質管理部）

施設と世代の垣根を超えた、地域にひらく交流の場 ～地域とともに～

秋祭り お客様感謝イベント

神奈川県相模原市

グループホーム エクセレント相模大野

10月19日(日)、グループホームエクセレント相模大野と有料老人ホームボンセジュール相模大野による共同開催で、「秋祭り お客様感謝イベント」が行われました。両施設は目の前に位置しているものの、これまで交流の機会はほとんどありませんでした。しかし、「何か一緒に、みんなが楽しめることがしたい」というそれぞれの施設長の思いが重なり、今回の開催につながりました。



開催に向けては、ボンセジュール相模大野と第一生命の担当者とともに打ち合わせを重ね、地元企業にも声をかけながら、徐々に規模を広げて準備を進めたそうです。

当日はあいにくの雨模様となり、午前中だけの開催となりましたが、両施設の利用者・入居者やそのご家族、周辺地域にお住まいの方など、あわせて100名以上が参加し、施設や世代の垣根を超えた交流の場となりました。

施設入居者からは「他の施設に入る機会はなかなかないので楽しかった」「お出かけ気分を味わえた」との声が聞かれ、地域の方からも「近くで子どもが楽しめるイベントをしてくれてありがたい」「施設を知るきっかけになりました」と好評でした。また、職員同士も相互に施設見学や交流を行い、よい刺激を受ける貴重な機会となりました。



小松施設長は、「今後も共同でのイベント開催や、地元企業の参加を促進し、交流の輪をさらに広げていきたい」と話しています。今回の取り組みは、利用者・家族・地域・地元企業・職員それぞれにとって価値のある関係が築かれるものでした。今後もこうした地域にひらく交流が続いていくことを楽しみにしています。
文責：三浦 祐花（品質管理部）

Quality Quest –

「問い」から始める品質探求

Quality Quest — 「問い」から始める品質探求

品質とは、仕組みだけでつくられるものではありません。

人がどう育ち、どう関わり、どう動くか——その積み重ねが、日々の品質を形づくっています。

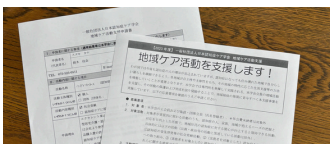
Quality Questでは、品質管理部が現場へ足を運び、実践の背景にある考え方や設計を「問い」とともに探っていきます。

「その認知症カフェは、なぜ“毎週続いている”のか？」

— 鈴木SVの実践。人づくり・組織づくりの設計 —

今回は、京都エリアのスーパーバイザーであり小規模多機能、グループホーム、特定施設と3種類の地域密着型サービスの管理者でもある鈴木SVへのインタビューを通じて、「認知症カフェを続けるには」という問いを軸に、運営の工夫や組織づくりを見つめ直しました。

無事に申請が通り、補助金の約10万円を元にコストを抑えながら必要なものを揃え、小さく、背負わない設計でスタートしました。地域でも認知症カフェの継続は課題ときき、「誰がやるのか」「何をやるのか」といった決めることの多さが原因と仮説を立て、まずは無理をしない設計を意識。



◀取組みの後押しになった「地域ケア活動支援事業」のチラシと一会員として応募した際の申請書類

桂での再実践

—施設が変わっても、同じプロセスで

桂に着任後も、すぐに認知症カフェを始めたわけではありません。ここでも約1年間は、職場づくりと信頼関係づくりを優先し、体制が整ってから開始しました。その結果、毎週開催・1年間継続を実現。施設が変わっても同じプロセスで再現されていることから、この取組は個人の力量ではなく、設計によって支えられている実践であることが見えてきます。また鈴木SVは、「前施設長が自律的に動く風土をつくってくれていたことが大きかった」と振り返ります。個人に依存せず、現場が自ら動ける土台があったからこそ、同じ取組が別の施設でも自然に根づいていった、そんな背景が浮かび上がってきます。

組織運営設計の特徴

—リーダー体制を「整える」

運営体制を整えるにあたり、鈴木SVが最初にしたのは、リーダーが多くの業務を一手に背負わざるを得ない状況になっていたということでした。そこで、役割を整理し、負担を分散。全職場にリーダーを配置し、月に1回、リーダー会議を中心にコミュニケーションを図る日を設定し、会議をそこに集約しました。現場での判断はリーダーに任せ、相談や報告はいつでも受ける体制とし、リーダーを通じた判断・相談の流れを大切に、職員が直接施設長へ判断を仰ぐ「頭越え」が起きない構造としました。その結果、職員が安心して自分の役割に専念できる運営体制が整っていきました。

運営設計

「シフトありき」ではなく「組織ありき」

運営推進会議とリーダー会議を同日に固定開催とし、その日を軸にシフトを調整。地域の方とも、職員とも、丁寧に向き合う時間を確保できる設計が、日常的な関係づくりにもつながっていました。運営推進会議で地域の方々の意向を伺ったうえで、認知症カフェは毎週金曜日の開催としています。

開催情報は地域発行の瓦版（自治会ニュース）にも常時掲載され、特別なイベントとして扱われるのではなく、通常業務の中に組み込まれています。そうした運営のあり方が、無理のない継続を支えているように感じられました。

決めすぎない運営

—「揺らぎ」を許容する

プログラムは固定せず、お茶会のみ、園芸からカラオケなど、その日の状況に応じて柔軟に対応します。利用者の参加状況を見て、職員が自然に声をかけ、見守りに入る。現場の判断が生きる余地が残されています。この運営が成立しているのは、事前の人づくり・組織づくりによって信頼関係が築かれているからです。

続いている理由

—引き算のマネジメント

こで行われているのは、何かを足すマネジメントではありません。

- ・無理をしない
- ・背負わせない
- ・決めすぎない
- ・任せるが、放置しない

続けられなくなる要素を取り除く「引き算のマネジメント」だったのかもしれない。人づくり ⇄ 揺らぎの許容 ⇄ 人の成長。この循環が、静かに回り続けていました。

はじめに

—「続けること」が、いちばん難しい認知症カフェは、立ち上げること以上に、「続けること」が難しい取組だと言われています。実際、多くの施設で短時間で終了してしまうケースは少なくありません。

そんな中、鈴木SVは、管理者として着任したグループホーム東山・桂の2施設で、認知症カフェの継続運営を実現してきました。

特に桂では、毎週開催×1年間継続。

なぜ続いているのか。

なぜ、続けられているのか。

今回のQuality Questでは、その理由を探るべく、坂本部長が鈴木SVにインタビューを行いました。

着任後すぐに始めなかった理由

—最初の1年は「基盤づくり」

東山でも桂でも、鈴木SVは着任直後に認知症カフェを始めていません。

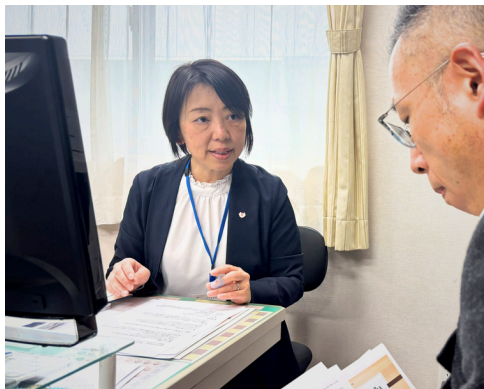
最初の約1年間は、●職員との対話●職場状況の把握●リーダー体制の再構築 を最優先にしていました。新しい取組より先に、安心して仕事ができる土台を整える。この準備期間が、その後の継続の前提になっていました。

初めての地域密着型サービス施設

—継続が難しいと行政からのお墨付でも

最初の挑戦は、グループホーム東山でした。

（一社）日本認知症ケア学会の地域ケア活動支援事業に一会員として応募。「どうやって継続させるのか」と問われた鈴木SVは、「私が、毎回います」と答えたといいます。



Quality Quest begins with a question.



問いの先に 見えてきた景色

認知症カフェが続いている理由は、特別な企画や熱意だけではありません。人づくり・組織づくりを先に行い、安心して仕事ができる土台の上に、揺らぎを許容するマネジメント設計を重ねてきたこと。その結果、人を動かすのではなく、人が自然に動き続ける環境が、そこにありました。

お 話：鈴木 佳奈さん
（スーパーバイザー/エクセレント桂 施設長）

問 き手：坂本 圭（品質管理部）

撮影・構成：石原 浩巳（品質管理部）

PriQ・連載企画インタビュー

Vol.3

未来へのバトン

言葉がつながり、わたしたちのこれから。

その想い伝えさせてください。
語られる経験が、今を歩む誰かのエール
となり、仲間の明日を照らす力になる。



お話：山本 美紀
すいーと上桂 調理兼介護職

介護施設の調理員というお仕事の内容を教えてください。

主に昼食・夕食のお食事作りをはじめ、四季折々の行事食やテーマに沿った企画食の提供、手作り餃子大会や炭火焼バーベキュー大会など、施設内での食事レクリエーションの企画・実施を行っています。加えてご利用者様のお食事状況の把握、各フロアの衛生管理状況の確認、食材発注業務全般も重要な役割です。さらに、食事検討会議や調理員研修で得た重要事項を施設職員へ発信・共有し、現場全体に周知していく役割も担っています。

介護施設の調理員として働く中で、一番やりがいを感じる瞬間はどんな時ですか？

調理中は、食材一つひとつをどの大きさにカットし、どの程度の柔らかさに仕上げれば、見た目を損なうことなく、スムーズに召し上がっていただけるかを常に考えながら業務にあたっています。柔らかいお食事が必要な場合には、様々な調理器具や酵素などを日常的に活用し、工夫を重ねながら素材の形状を活かしたお食事を完成させています。食器の中身がきれいに空になっているのを見るたびに、「さらに良いお食事を提供したい」と向上心が湧いてきます。また、食卓が団欒の場となるよう、ご利用者様と同じ食卓を囲み、お話をしながらお食事をいただくことで心の距離が縮まり、笑顔を返していただける瞬間に、日々大きなやりがいと喜びを感じています。

調理師免許を当社に入社されてから取得されたとお聞きしましたが、どのような経緯や思いで取得されたのでしょうか？

「自分の作るお食事がご利用者様の力となり、元気に暮らしていただく源になれば」その思いを胸に、入社当初から少しずつ勉強を続けてきました。入社当時は受験要件を満たしていませんでしたが、エクセレントで勤務を続ける中で数年後に受験資格を得ることができ、「今がその時だ」と思い切って受験を決意しました。

学習を進める中で、「根拠を持って」ご利用者様や介護職員の方々に食事面のお話ができるようになったことは、大きな成長だと感じています。また、介護資格取得のために仕事と勉強を両立しながら努力されている介護職員の皆さんの姿に強い刺激を受け、「自分もそうありたい」と思ったことも、受験を決意した大きなきっかけの一つです。

ご利用者様から、お料理に関する印象的なエピソードはありますか？

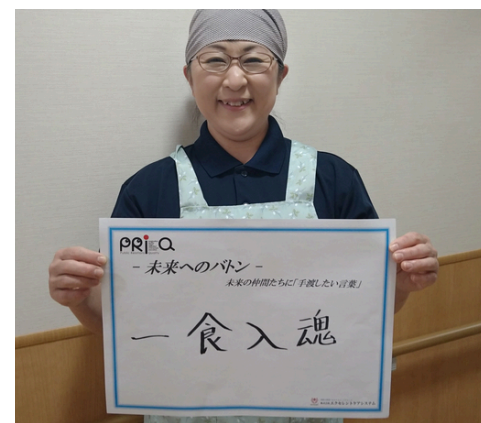
施設長から「お食事をいただくということは、人の命をつなぐこと」「あらゆる食材や調理器具を活用し、調理業務に向き合ってほしい」と常々教えられ、日々真摯に調理業務に取り組んでいます。また事業所内では「看取りケアは出会った瞬間から始まっている」「一日一日を100%の思いで向き合うことが大切」と共有されており、ご利用者様に感動していただき、気持ちを解放していただけるお食事を心がけています。「都会で生活されていても、屋外の空気に触れていただく」お食事はそれを実現できる絶好のシチュエーションだと感じています。テーブルクロスを敷き、お菓子とお茶を召し上がっていただくだけでも、表情が明るく穏やかになります。「次はバーベキューをしよう」「秋刀魚を炭火で焼こう」と、楽しみも広がりました。季節の食材を目の前にお持ちすると、香りや手触りに目を輝かせ、若い頃の思い出やご家族の話を語ってくださることもあります。また毎月「餃子の日」を設け、ご利用者様・ご家族様と一緒に餃子を包む取組も始めました。



お食事を通して、身体の栄養だけでなく、心の栄養にもなればと願っています。盛り付けから片付けまで皆で行き交う光景を見て、ここは「キッチンでしかできない生活支援の場」だと感じています。

最後に「未来へのバトン」として、次の仲間へのメッセージをお願いします。

エクセレントの自社調理は自由度が高く、一人ひとりの思いを形にできる、他にはない環境だと思います。私自身、エクセレントに入社し、心豊かに成長させていただきました。身体が思うように動かなくなっても、認知機能が低下されても、その方に合った役割を見つけ、調理に関わっていただきたいと考えています。お一人おひとりを深く知り、どうすれば笑顔になっていただけるのか、安心して生活を楽しんでいただけるのか。そのきっかけとなる場所としての「お台所」づくりを、これからも目指していきたいと思っています。お食事を通して、これからもご利用者様を支え続けていきたいです。



山本 美紀（やまもと みき）さん
飲食店で調理の経験を積み、エクセレントケアシステム入社約5年6か月。現在はグループホーム すいーと上桂にて、調理兼介護職員として勤務している。子育て期間中に介護資格を取得し、「調理」と「介護」両方に関わる仕事に魅力を感じ入社。日々、ご利用者様に「おいしい食事」を届けている。

編集後記

by 品質管理部



- 今年の目標は、毎日の朝活勉強、毎週2回の筋トレ、毎月1回以上のトレッキング(年間300km)です。(ライム&メロン)
- 「ピーアール アイキュー ペーパーとピーアール アイキュー ティーヴィー」 随分3回言えますか？ 表情や顔の筋トレになりそうですよ。ぜひお試しください。(まーらいおん)
- 今年は娘が小学生になります。「色々な成長を見せてくれるかな」と今から楽しみです。(ボール)
- ある日、ChatGPTに私の性格分析をしてもらいました。結果、同僚や家族から言われることと全く同じで驚き。私の今年のテーマは「柔らかく生きる」です。(でめきん)